

月刊

# 地域保健

12  
2009

● FACE 2009

大森純子さん

聖路加看護大学 地域看護学准教授



●特集

## がん検診 受診率を 上げる

地域の健康、個人の健康を支える「交流」

「困る前からの関係性」を重視



聖路加看護大学地域看護学准教授

大森純子さん

保健師の特異性は、他の看護職と比べ社会的な側面に比重が置かれているところにあります。「コミュニティ」や「交流」などの概念は、保健師活動を考える上でも重要なポイント。これらの概念を中心に、人々の健康観について研究を続けておられる聖路加看護大学の大森純子先生にお話を伺いました。

## 「健康」とは多面的かつ主観的なもの

—人々の健康観について研究されていますが、先生の考える「健康」の定義についてお聞きします。

**大森** まだ研究途上ですから定義は毎年進化していくのですが、命の質、生活の質、人生の質をすべて含めたもので、生きることの充実感を社会的側面から個人の主觀によって示す概念というのが、現時点における、私の定義です。単に疾患のあるなしだけでなく、人々の幸せやより良い暮らしの文脈の中で捉え、人々がお互いに支え合つた

り、育ち合つたりする現象も含めた概念であると考えています。

「健康」は、地域の住民自身が日々の生活の中で自分の力で獲得していくもので、多面的かつ主観的なものです。どのような精神的、身体的状態であつても、それぞれの状況に応じて、自分なりのやすらぎ、楽しみ、誇り、希望、幸せなどの内なる活力、それを日本人は「元気」といいますが、その元気を感じながら一日一日の暮らしを弛みなく営むことのできる状態、営みそのものをいうのではないかと思います。ですから、「健康」は専門職が決めるものでもないし、専門職のゴールでもありません。

それは地域社会における安寧という言い方もできます。地域社会の秩序が乱されば、そこに住む個人を脅かしますし、たった一人では本当の「健康」は得られないということから考えていくと、自然に人と人との結びつきや「交流」が大切であるという視点が出てきます。

—特定健診・特定保健指導にしてもそうですが、行政の施策の上では「個人」に焦点が当たられがちです。「コミュニティ」や「交流」といった社会的な視点が背景に没してしまって傾向がありますね。

**大森** そうですね。特定健診・特定保健指導はポピュレーションアプローチとセットで考えないと、本当に効果が定着するのは難しいと思います。例えばヘルシーシティのように、「健全なまちが健康な人を育てる」という

# がん検診受診率を上げる

特集

50%

受診率50%と死亡率減少を目指して



がんは日本人の死亡原因の第1位であり、生涯リスクは男性51%、女性39%となっている(2002年罹患・死亡データに基づく)。しかし、市町村でがん検診が一般財源化されてから検診受診率は低迷が続き、先進国の中では最低レベルが続く。国は平成17年に厚生労働大臣を本部長とする「がん対策推進本部」を設置、19年度には「がん対策基本法」を施行するとともに「がん対策推進基本計画」を策定した。同計画の中では23年度に各種がん検診の受診率50%以上達成が掲げられ、これを受けて各自治体で受診率向上の取り組みが進んでいる。特集では国のがん対策についてまとめるとともに、保健師等の努力によって受診率向上に成功した自治体の取り組みを紹介する。

## p16 わが国における「がん」の現状と対策

厚生労働省健康局総務課がん対策推進室 森 創

## p24 案内・申し込み・勧奨一体型の申込書で受診率向上

●山形県酒田市

文・写真 西内義雄(医療・保健ジャーナリスト)

## p32 「お得感」をくすぐる広報戦略が功を奏して 健診を受けてゲットだ お米券

●山形県米沢市

米沢市健康福祉部健康課 横山久子

## p.40 胃がん検診を主体とした早世予防と健康寿命延伸 検診受診率向上と死亡率減少を目指して

●富山県滑川市

滑川市民健康センター 石原和子

## p48 4つのがん検診で精密検査受診率ほぼ100%を達成

●千葉県長生郡長生村

長生村役場健康推進課 池 礼子



# 栗栖由佳さん

くりす ゆか  
和歌山県東牟婁振興局健康福祉部（新宮保健所）串本支所  
●文・写真 西内義雄（医療・保健ジャーナリスト）

看護観をワインのように  
熟成させていきたい

すべては成長のための経験



串本の名所、橋杭岩（国の天然記念物）にて

和歌山県の串本は紀伊半島の南端にあり、本州最南端の町として知られている。ここに県採用の保健師として活動し、すでに転勤も経験しているひよこさんがいると聞いてやつてきた。

JR古座駅からほど近い新宮保健所串本支所に入るとすぐに出でてくれたのが、今回の主役である保健環境課の栗栖由佳さんだ。平成19年度に和歌山県に採用されたので3年目の26歳。周囲をパツと明るくする要素があることは第一印象から感じられた。

栗栖さんの出身は県内の上富田町（人口約1万5000人）。子どものころは医師になることを夢見ていた。「漠然とですけど、人を助ける仕事がしたいと思っていたのです」

小学校では警察官の父親の影響もあり剣道を、中学ではソフトテニス部に所属し、真っ黒に日焼けしながら毎日コートを走り回っていた。ちょうどそのころ、母親が介護関係の仕事に就き、

家で仕事の話を聞いていくうちに介護や福祉にも興味を持ち、人と接する仕事への思いが高まつていった。  
「母が楽しそうに、イキイキと働いていたのが印象的でした」

高校生のとき、母親はこんな話もしてくれた。

「介護の職はどうしても医療に弱い部分がある。高齢の方をみていくときに、体の状態など医学的なことを勉強しているともっと良いケアができると思う」

この言葉を聞いた栗栖さんは、「対人の仕事をしていく上で医療の知識が役に立つ」ことを理解し、「福祉的なかかり+医学」という計算式が浮かんだ。すでに高校生活も終盤となり、将来のことを考え始めていた時期だったので

答は将来に直結すると感じていた。

導き出された答えは「看護」だった。医師よりも看護の仕事を目指すほうが自分の求めている分野だと感じた



窓口の対応でも笑顔を絶やさない